

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その7 —

知られざるビルマの名将宮崎中将

人道・自然の摂理・知恵と勇気

高松重信・著



山岳で大砲を分解し担ぎ、一步一步、前進する日本砲兵部隊の将兵



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 / 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞り勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



『世の中には出来そうにない事でも、やらねばならない事がある。

出来る事でもやってはいけない事がある。

この判断基準こそが、その人の価値を決める。』

旧日本陸軍少尉 小野田 寛郎

1. 初めに

現下の我が国はGDP成長率および世界産業の競争力の相対的な鈍化、あるいは昨年来のコロナウイルス感染に対する日本政府及び我々国民の取組方の不十分さによる倦怠感、また一部有力な報道機関はコロナウイルスや巷間での発生事象に関して過大で自虐的報道に終始している。このような中で、目下、日本の風向状態は意気消沈の傾向が見受けられる。

我が国は蒙古来襲（1274年の文永の役、1281年の弘安の役）以来、幾多の疫病、災害及び戦火など国難に対して敢然と立ちあがり、それらを克服している。単に政府批判や意気消沈するばかりではなく、我々は政府と一体となり、勇気・知恵を絞り希望をもって我が国の国力低下と疫病などの諸問題に対峙し克服すべきと思う。

この意味において、一般的には知られていないが、彼の過酷で悲惨なビルマのインパール戦線などの末期的な戦であっても、人道的な思慮と自然の摂理を遵守し勇気と知恵を持って不敗の戦いを続行した宮崎支隊の実話を紹介させて頂く次第である。些かでも御参考になりますれば望外の喜びである。

2. 宮崎繁三郎 陸軍中将

帝国陸軍屈指の野戦指揮官・宮崎繁三郎 陸軍中将は1892年（明治25年）1月4日、岐阜県厚見郡北島村（現在は岐阜市）で生まれた。繁三郎は陸軍士官学校（26期）に入学したが、成績はずば抜けて良いわけではなく、出世は必ずしも早くはなかった。士官学校での成績は737人中230番であり中の上であった。成績優秀というわけでもない宮崎が、連隊長からの推薦を受けて2度目の受験で何故か1921年に陸大（陸軍大学校）第36期生になれた。

多分、運が良い人物であったかも知れない。陸大でも64人中29番と、やはり「中の

上」と目立たぬ成績で1924年に卒業している。しかし、前線における能力は抜群であったといわれている。

中国、ノモンハン、インパール作戦など、日本軍が劣勢に立たされた戦場で常に戦功を挙げたことで知られ、帝国陸軍屈指の野戦指揮官として称賛されています。



宮崎繁三郎 陸軍中将

3. ノモンハンでの戦い

現在では殆どこのノモンハン事件を忘れられているので、少々本事件を説明する。ノモンハン事件は昭和14年（1939）5～9月にかけて日本が実質的に支配していた満州国とモンゴル人民共和国の国境線問題で発生した紛争。両国警備隊の交戦をきっかけに、満州国を支配していた日本と、モンゴルと相互援助協定を結んでいたソ連がそれぞれ軍を投入。大規模な戦闘に発展した。

※両軍の損害

損害別	日本	ソ連	モンゴル軍
戦死	7,700人	9,700人	280人
戦傷	8,600人	16,000人	710人
戦車	29両	400両	数十両
航空機	160機	1600機以上	

● (1) ノモンハン事件とは

ノモンハン事件は歴史上、日本の敗北であったと語られています。

日本軍は数倍のソ連軍と戦い大きな損害を出している。しかし、勝敗と言えば、損害数から判断すると日本軍が勝者であったと判断できる。このノモンハンンの勝敗よりも日本は総括し、将来に資するべきであったが、そうはしなかった。先の大戦及び現在に至っても一事業が終了すれば、その成否に拘わらず総括し次に生かさず、頑迷に同じ寓を犯しているのが我が国の悪癖習慣の様態である。第二次大戦もこの間違いを犯している。我々はこれを反省し今後の教訓にすべきと思う。



擱座されたソ連装甲車と日本の重機関銃

➤閑話休題。

ソ連は何故この事件に多量の軍を投入したか、その原因を究明すべきであった。(ソ連の弱点、外蒙古への問題など)。また、ソ連とドイツとの対峙問題など国際的な力のバランスを見抜き事件の処理をすべきであった。更に、軍事学的にはソ連の航空機・戦車などの機甲部隊による空陸一体となった戦術の近代化に目をむけなかった。これが以後、日本軍の近代化遅延への過ちを犯すことになってしまったのは残

念である。

● (2) ノモンハンに於ける宮崎連隊の戦い

昭和14年（1939）3月宮崎繁三郎は新発田の歩兵第16連隊長を拝命し、5月中旬に発生したノモンハン事件のために急遽、ハルピン経由で現地に派遣された。

宮崎大佐は先ず、敵の戦力・布陣を周到に調査し、地図及び現地の写生図と攻略の戦術、手順などを各隊長に伝えた。また、ソ連軍の戦車対応として大隊砲、速射砲などの対戦車砲を準備配置するとともに、近接対戦車戦として棒地雷、火炎瓶攻撃も準備した上で、今迄の経験を生かした実戦に近い訓練を熱心におこなった。敵の兵力は歩兵・騎兵二個大隊、戦車約150両、野砲、山砲十数門、迫撃砲、飛行機50～60機である強敵であった。戦闘状況は省略するが、16連隊は敵の戦車、砲爆撃に見舞われたが、準備し猛訓練していた対戦車砲などで敵戦車などを撃破し、目標の904高地を予定通り攻略したので、以後、日本軍の展開が有利に進んだ。模範戦闘と大いに称えられた。



新潟・新発田の歩兵第16連隊

● (3) 戦略的な国境の石標

停戦の協定締結の日、繁三郎は石工に日時と連隊名を刻ませ、地中深くに埋めさせた。停戦後、双方国による国境決定委員会が国境を決めるとき、無理押しをするソ連側に対して宮崎が埋めさせた石標を掘り出して、日本軍が占拠していた証を示した。この明確な証拠に流石に頑迷で狡猾なソ連側の委員も脱帽せざるを得なく、日本軍の一連隊長の戦略的な準備に従わざるを得なかった。停戦後協定を見越して石標を砂の中に埋め込むと言う深慮遠謀な戦略眼を持つ宮崎繁三郎は戦争の逸材と云って過言ではない。



掘り起こされた国境の石標

4. インパール作戦の殿（しんがり）を見事果たす。

1944年（昭和19年）、7万もの日本将兵の犠牲を出した悲惨なインパール作戦に宮崎少将は第31師団・歩兵団長として参戦している。第15軍牟田口廉也司令官の補給を無視した無謀なその中で宮崎少将の働きは称賛に値する。宮崎は山岳地帯で自ら大きな荷を背負い、部隊の先頭に立って激戦の末、インド北東部の都市・インパールへの重要な補給路であった要衝の地・コヒマを攻略したが、ほどなく猛烈なイギリス軍の反撃が始まり、第31師団は補給路を断たれて孤立したが、第15軍は第31師団に無謀な命令を下すばかりで食糧や物資を供給せず、将兵は撃つ玉もなく徒に戦傷や飢餓で倒れていった。

1944年（昭和19年）6月2日、補給が長期に渡って途絶え戦死病が累々とした31師団の佐藤中将は最早これまでと判断しコヒマから軍命に反して退却を命じた。この援護のために宮崎連隊は最も困難な殿（しんがり）を務める命令を受けた。

しかし、連隊といっても戦える戦力は僅か約700名と工兵（施設兵）と極少数の山砲隊のみであった。敵は4個師団（8万人以上）と戦車一個師団（戦車300両以上）と500以上の優勢な空軍（当時、この地で使える日本空軍は皆無）。この絶望的な戦いにも沈黙の名将・宮崎繁三郎は不平不満を言わず、ただ本隊である31師団がウクルルまで転進（後退）するまでこのコヒマ～インパール道を死守する作戦と準備を将兵と共に計画した。詳細は省略するが、押し寄せる敵を繁三郎は奇術の限りをつくした。

隊を二つに分け、一隊が敵軍と奮戦している間に、もう一隊は次の第二線陣地を構

築させ、しかも敵軍に夜襲を繰り返して、部隊が多いように見せかけたり、陣地には敵に抗戦する陣地と旗などを立てた擬装陣地をつくり、敵が間違えて無駄な攻撃をするように仕向けた。また、敵陣内に日本軍の旗を立てそこから他の敵陣にむけ射撃し、敵の味方同志打ち合いをさせ損害を与えたりした。工兵は道路と橋の破壊をおこなうと同時に、近接した敵戦車隊に肉薄攻撃をかけた。

この不屈の戦いに英軍の司令官もつくづく感心し、英軍の戦史にもこの時の宮崎支隊の戦いぶりが特筆されているとのこと。このようにして宮崎支隊は約一か月間の強大なる敵軍を31師団が所定の位置まで撤退する援護を果たし、目的を達成したのである。

更に、特筆すべきはこの撤退に当たって繁三郎の卓越したリーダーシップであった。陣頭指揮に当たるのみならず、自分の貴重な食糧を部下たちに分け与え、負傷兵を載せた担架を自らも手で担いだ。撤退の道中、負傷兵を見つければ隊の所属に関係なく收容し、遺体があれば丁寧に葬りました。英軍の追っ手が目の前にまで迫る中、支隊からは一人の負傷兵も置き去りにせず、餓死者も出さず、見事に殿(しんがり)の役割を果たし、撤退を完了させたのである。



インパール進撃中の日本将兵

5. レモーの大撃滅戦

宮崎繁三郎は昭和19年（1944年）秋、我が郷土・姫路第54師団長に親補された。この師団はアキャブ（現シットウエイ）地方で戦っていましたが、アラカン山脈を越え撤退してイラワジ河流域に行くのには前面の敵に一撃を加えることが重要であった。

そこで、繁三郎はレモーの敵軍を一掃する作戦と十分な準備をした後に攻撃を開始した。結果はレモーの敵数千人を撃滅し、付近のインド第25師団と他の4個師団とも戦い、宮崎戦術を十分に発揮し英軍指令官に脅威を抱かせ、アラカン守備作戦を終了させたのち無事に、宮崎師団はイラワジ河流域に去っていったのである。

全体としてビルマでの戦いは惨憺たる戦いであったが、宮崎の下で戦い抜いた将兵たちは皆、「自分たちは負けていない」と胸を張っていた。宮崎は何度も敵中に置き去りにされる目に遭いながら、司令部を批判する言葉は一切吐かなかった。

6. おわりに

戦後、あの過酷なビルマ戦線に関する物語は数多く発刊されており、殆どが作戦失敗と武器・弾薬及び食糧などの補給不足により悲惨な結果になっている場合が多い。しかし、宮崎繁三郎はこの過酷な戦線で、最も困難な戦いを命じられても、不平不満を言わず、軍人として本筋を外すことなく、ただ黙々とその目的をはたすべく、敵戦力を十分に把握し、戦う武器及び食料を確保し、将兵と共に勝利できる作戦のために知恵を絞り、必要に応じて訓練を行い、その目的を達成し使命を果たした。

他方、戦争と言う過酷で非人道的な中であっても、ビルマ民衆及び部下将兵に対してヒューマニズムな行動を些かも失わなかった。大東亜戦争後半、日本軍はついに負け戦のサイクルから脱することができないまま、敗戦を迎えたが、宮崎中将はその中で勝ち続けた稀少な名将の一人であったと評しても過言ではないと思う。

最近の日本はコロナウイルス問題、少子化、高齢化社会、次なる産業への展望及び米中対立への対応問題など極めて重要な課題に遭遇している。つまり我が国は有史以来の重大な国難に直面している。

過日、我が国のこれら状況を作家五木寛之氏は『日本は山を下っている』と評して

おり、また、『この下山が重要』とも提言している。

山に登れば下らなければならない。我々はこの下山をりっぱに行いつつ、次なる山に登るために、どの山にするのか、どのように登るかの青写真（ビジョン）と実行計画の策定および諸事を準備し、それらを実行しなければならない。つまり、我国のあるべき姿の設定とそれを達成するための計画、準備及び実行である。

この我が国の国難と言うべき「下山」から次の「登山」への重要な時期に、過って、宮崎中將が彼の過酷なインパール作戦に於いて、またその後の末期的なビルマ戦線で人道的な見地を厳守し、自然の摂理に従い戦い抜いている。

このことは、「如何なる条件下または状況下に於いても、必ず最善の策がある。我々はその策を見つけ出し、勇気をもってそれを実現すべきである。」ことの重要性を教えてくれていると思う次第である。



インパールへの道

終戦後、繁三郎はビルマのイギリス軍捕虜収容所に収容された。その際、自分の部下たちへの不当な扱いに対して決して泣き寝入りすることなく、その度に英軍に厳重な抗議を行った。つまり、戦いを終えて捕虜となっても、繁三郎は指揮官としての責務を決して放棄していなかった。

そして、昭和22年（1947年）5月に帰国。以後、自らの功績を吹聴するような行動は一切行わず、政治的・経済的な活動を一切慎み、小田急線下北沢駅近くの商店街に「岐阜屋」という陶器小売店を経営。その店主として穏やかな余生を送っていた。繁三郎は臨終に際し、病床を訪れたかつての部下に「敵中突破で分離した部隊を間違いなく掌握したか？」と何度も譚言（うわごと）を発していた。つまり、彼は亡くなるその瞬間まで、ペゲー山中からの敵中突破の際に失った部下たちのことを気にかけていた。

2021年3月7日
高松重信

引用および参考文献

豊田讓著『名将宮崎繁三郎』1-278頁、光人社、1986年5月

村田平次著『インパール作戦』1-298頁、原書房、1967年4月

吉良勝秋著『大草原にソ連空軍と渡り合う』131-168頁、今日の話社、1971年7月

瀬島龍三著『幾山河』1-502頁、産経新聞、1995年9月

長周新聞の掲載写真（インパール進撃中の日本将兵）

-----ビルマ戦線で戦死した一日本軍兵士の遺書 -----

もし玉碎して、そのことによって、祖国の人達が、少しでも、生を楽しむことが出来れば、祖国の国威が、少しでも強く輝くことができればと切に祈るのみである。

遠い祖国の若き男よ、強く逞しく、朗らかであれ、

懐かしい遠い祖国の若き乙女たちよ、清く美しく、健康であれ。

筆者略歴

たかまつしげのぶ
高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 8

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う
〈その7〉—知られざるビルマの名将宮崎中将—

高松重信 著

2025年4月1日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-07-2 C1810

©高松重信 2025